

# 新選組新史料発見始末記

本願寺史料研究所

## はじめに

二〇一四年九月二日、大喜直彦上級研究員が、本願寺史料研究所保管の日記・記録の中より、新選組に関する記事を発見・確認しました。

従来、新選組の西本願寺における活動は「新撰組始末記」(新人物往来社編『新選組史料集』新人物往来社、一九九三年)に記述されているのが、すべてと聞いていいでしょう。ただこの始末記が歴史的事実を記述しているかには疑問があります。

今回の記事内容は西本願寺での新選組の活動を示すもので、これまで知られていなかった事実でした。この発見は記者会見を通じて公表され、新聞やテレビなどのマスメディアで取り上げられて話題になりました。

その時、各記事の整理・研究の補助をしてきた私が、発見史

料の紹介、そして東京築地本願寺で初めて開催された公開講座の様子も合わせて「始末記」としてご報告させていただきます。

## 一 発見史料の翻刻と文意

ここでは、新選組に関する記事の中でも特に注目度の高かった史料二点(①②)をご紹介します。

### ①「諸日記」慶応元年六月二十五日条

一来書

新撰組

土方歳三

残暑甚敷御座候処、愈御勇壮被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>渡  
奉<sub>レ</sub>賀候、然者過剋参上、無<sub>レ</sub>抛場合無

体之致相願候処、早速御聞濟被<sub>レ</sub>下候

事、段々忝奉<sub>レ</sub>存候、就而ハ明早朝より

取懸り被<sub>レ</sub>下候趣、是亦忝仕合、何分速ニ

奉<sub>レ</sub>願候、猶

御門主様へも御序ニ宣敷御礼

申上可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候、先者御答草略

頓拝

六月廿五日

網野九十九様

野村郷之進様

### 【文意】

一來書（本願寺へ到来した手紙） 新撰組土方歳三より

残暑が甚だしい状況ですが、いよいよご勇壮でおられ、お祝い申し上げます。さて数刻前そちらに参上して、なんともし方がない場合として、ご無理なお願ひ致しましたところ、早速お聞き願ひをしてくださいました事、いろいろかたじけな忝なく思っております。ついでには明早朝より工事に取りかかって頂けるとの事、これまた忝い事です。なにぶんすみやかに実施されることを願ひ奉ります。なお、広如御門主様へも、この機会によりしくお礼を申し上げください。まず御

返答を申し上げます。

頓拝

### ②「諸日記」慶応元年六月二十二日条

（慶応元年六月二十二日条に収録されるが、本来は六月二十六日条に収録されるべきもの。前掲の二十五日の土方の依頼内容と西本願寺の対応を記す）

一新撰組取締土方歳三、昨廿五日参

殿仕、急速御類談申上度儀有<sub>レ</sub>之候而、

速御決答相成候方、御面会申度

旨申達候二付、則御納戸江相通候由候処、

同所より九十九面会可<sub>レ</sub>致候様との処、当病

二付、郷之進出会仕候処、兼而拝借罷在

候御場所、手広御座候得共、多人数

二付、当節者一畳一人ツ、位之割にて、

炎暑之時節、誠々以凌兼、追々病人

等も出来、公用も難<sub>三</sub>相勤<sub>二</sub>二付、局中一統より

段々申立制止難<sub>二</sub>行届<sub>一</sub>、仍<sub>レ</sub>之甚無

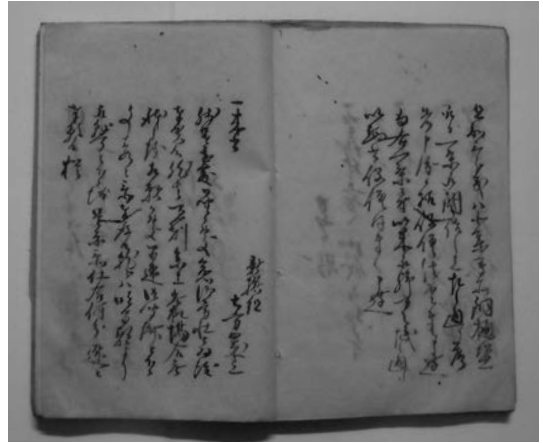
体成願ニハ御座候得共、

阿弥陀堂之内、御差支不<sub>三</sub>相成<sub>二</sub>御場

所、畳数五十畳程之処、拝借仕度



「諸日記」慶応元年六月二十二日条



「諸日記」慶応元年六月二十五日条

旨申聞候二付、右ハ如何様御願有候共、御差支之条、十四日講会所之辺ニ而、少々之場所拝借位之義ニ候ハ、其筋江可申入旨申聞候処、右場所ハ縮方ニ差支候間、只今拝借候家建統ニて奉願度、何分御重役方へ御申入、否御答、今日致承知度旨二付、一応為引取置、御納戸江及示談候処、阿弥陀堂之義者、御申通も無之、御差支ニ付、当時御貸与ニ相成候集会所中内陣板囲取締并後堂板敷之場所、夫々畳敷込、南北壁取払、風通行能可致遣旨にて、程能ニ及候方哉ニ評考仕、則昨日奉伺候処、伺之通、御下知相成候二付、以書中、右之段申出候処、別紙返書差越、尚亦同組目付役三木三郎与申者罷出、右も難有仕合、局中一統奉拝謝ニ二付而者、此中方々暑氣御困苦仕居候間、何卒片時も早く御取掛奉願度旨二付、則今廿六日早天より大工・手伝方相廻し、夫々取片付為仕

候、多分今日中出来も可仕、其上引  
渡可遣奉存候、仍而此段奉申上置

但、土方歳三書面入御覽候

「承し置」

## 【文意】

一新撰組取締土方歳三が、昨二十五日本願寺の殿舎（役所）に参り、急速にいろいろお話し申し上げたい事があり、速やかに本願寺のご決定のお答え頂きたく、御面会を御願いしたいと伝えてきたので、そこで御納戸を通じて行うこととし、同所役人網野九十九が面会する予定であったが、病気のため、野村郷之進が面会した。

そこで土方は、兼ねてお借りしている場所（北集会所）は手広いのですが、隊士の人数が多いため、現在は畳一畳につき一人が寝るといふ有様です。炎暑の時節、本当に本當に我慢できない状態です。そのため、時が経つにつれ、病人などが出てきて、公用も勤めることができません。局中一統より様々な申し立てがあり、もう制止ができません。そこで大変無理な願いとは存じますが、阿弥陀堂の内、お差し支えない御場所で、畳数五〇畳程を拝借したいの

です。

この旨を申し出てきたが、右のことはどのようなお願いであっても差し支えがある。十四日講会所の付近で、少々の場所を貸すことくらいならでき、その関係者へ申し入れると、土方に伝えた。

そうすると、土方は、右の場所は締方に差し支えるため、只今拝借している家に建て続けてお願いしたいと望んだ。何分、本願寺の重役（家老衆）へその事を申し入れると、「否」というご返答であった。土方も今日そのご返答を承知したい（受け入れたい）と思いますと伝えて来たので、一応、この願いは引き取ってもらった。

御納戸へ示談したところ、御納戸からは、阿弥陀堂は言うまでもなく、差し支えがあるので、現在貸与している北集会所の内陣を板囲で取締り、後堂の板敷きの場所に畳を敷き込み、南北の壁を取り払い風通しをよくするようにすれば、適度に環境もよくなると考えて、この意見を昨日二十五日に上位の役人（家老衆）へ伺いを立てたところ、意見の通りでよいという門主よりのお下知が出た。

そこでこのことを書状にして、新撰組方へ申し出したところ、別紙の返書（土方の書状）が届けられた。なおまた新撰組の目付役三木三郎という者が参上して、このようなお計らい有難いこととあります。局中一統、たいへん感謝致しております。このお取り計らいのなか、暑さでみな困

苦しておりますので、なにとぞ少しでも早く工事に取  
りかかって頂きたい、と歎願してきた。

そこで今日二十六日早天より大工・手伝方を手配し、各  
職人が自分の担当箇所を仕上げ、およそ今日中にも完成す  
ると思われれます。完成次第、新撰組方へ引き渡したいと存  
じます。

よってこの一件をまとめて、申し上げます。

但し、土方歳三書面も御覧に入れておきます。

「承し置」（上位者の確認記載）

## 二 土方のゆ・う・う・つ

新撰組は、元治二年（一八六五）三月十日、京都壬生の屯所  
から西本願寺にやってきました。そして同寺を退去したのは、  
慶応三年（一八六七）六月十五日です。移転してきた時の屯所  
は現存しませんが、当時の北集会所きたしゅうえいしょが  
あてられました。同所は明治四年（一八七一）八月十八日に、  
亀山本徳寺（姫路市）へ移築（御用向日々取扱当座留帳「本願寺史料研究所保管」）され、  
同寺の本堂となっています。

なお北集会所は、現在の阿弥陀堂北側に所在していました。  
その場所は現在伝道本部になっています。

さてこの発見史料で最も注目すべき点は、北集会所に入った  
新撰組の状況が新撰組側から吐露されていることです。

新撰組には当時約二〇〇人の隊士がいました。そのため、北  
集会所では狭く、畳一畳に一人寝る状態にあったことがわかり  
ます。旧北集会所（現、本徳寺本堂）の図面をみると、外陣の  
みの広さが二〇〇畳であるため、土方側の主張が正しいことが  
わかります。

その上、今夏は暑くて暑くて耐えられないと訴えています。  
土方が「誠に誠に」と二回「誠に」を使用するところに、土方  
の必死さを感じます。通常、「誠に」というのは一回の使用で  
事足りるのに、わざわざ二回表現するのは「本当に本当に」暑  
くて我慢できなかったものと思われれます。

土方は、これでは「公用」もできず、局（組）内でも何とか  
してくれとの声が制止できない状態にあり、病人も出ていると  
訴えます。

この病人については、医師、幕府の將軍侍医などを務めた、  
松本良順りょうじゆん（一八三二～一九〇七）の回想録『蘭疇自伝』  
（一九〇二年稿了）に、慶応元年閏五月頃、良順が屯所見舞いを行っ  
た時の状況が記されています。そこには、隊士に横や仰向けで  
寝転がるもの、裸姿のものが多く、無礼で規律がなっていないと、  
良順が近藤勇に迫る場面があります。

近藤は、これは皆病人で仕方が無いのである、と答えていま  
す。良順は、その数が全体の三分の一にも至っていると、  
「驚くに堪えたり」と言っています（小川鼎三・酒井シヅ『松本  
順自伝・長与専斎自伝』平凡社東洋文庫、一九八〇年）。

新選組は、この時三分の一〇およそ七〇人弱が病人で、隊士として役に立たなかったことがわかります。この話は良順の回想録で、話の内容が数十年前のものであり、そのまま信用することはできませんでしたが、今回の史料からそれが事実であることが確認されました。

これほどの病人を出した環境の劣悪さは事実で、土方が西本願寺に必死に訴えたのも、このままでは新選組が機能しなくなることを焦ったからなのでしょう。

従来、壬生から西本願寺への移転は、長州藩と西本願寺のつながりに対して監視するためとされてきました。それも事実ですが、今回の史料内容からみて、隊士増加による広い空間確保の必要性という理由が大きいのではと考えられます。隊士の移動も大がかりになり遠方では労力が大きいため、壬生からより近い本願寺が選ばれたのではないかと考えられます。

新選組は当初まがりなりにも「尊皇攘夷」の思想集団として結束していました。幕府も建前では当初「攘夷」の立場でした。しかし駐屯前年六月の英仏米蘭四カ国艦隊による長州藩の下関攻撃により、幕府は西欧の力を知り、事実上攘夷を放棄しました。但し朝廷に対しては攘夷の態度をとっていました。

土方・近藤ら新選組も幕府方として尊皇攘夷を放棄せざるを得なくなりました。そのため、西本願寺に駐屯する頃から本来の結束力を失い、この結束力を維持するため暴力的な方向で引き締めをはかるようになりました。事実駐屯頃より隊士切腹が

増加しています（松浦玲『新選組』岩波新書、二〇〇三年）。

この結束力の弱体化は、新選組の崩壊につながる大きな課題で、その上、駐屯の劣悪環境がそれを加速させることに、土方が焦り、必死に西本願寺に訴えたものと思われれます。

その結果、土方はついに隣の阿弥陀堂のなかで五〇畳ほどを使用させてほしいとの要求に至りました。この事実は今まで知られていなかったことです。阿弥陀堂は西本願寺の聖域で、この要求は、さすがの土方も「扱はん所なき無体な」願いと認められているように、西本願寺にとっては無茶な要求でした。それを知った上で土方が願ったのは、上記のように新選組の存亡に関わる事態に至っていたからなのです。これは彼の最後のカードで、このことを切り出せば、西本願寺が動くかと判断したのでしょう。

西本願寺は当然阿弥陀堂使用を許可しません。そこで西本願寺は、北集会所の後堂の場所に畳を敷き、南北の壁を破って風通しをよくするという提案をしました。この対応もこれまでは知られていない内容です。

最後に暑気で困苦しているので、早く実施してもらいたいと土方が訴え、西本願寺は二十六日早朝から実施すると返答しています。

①の手紙は土方の礼状ですが、無理なお願いを詫び、そしてはやく工事をしてもらいたいと述べており、かなり追い詰められていたことがわかります。

慶応三年（一八六七）六月十五日、新選組は不動堂村に転居

します。この移転の功労者は西本願寺家臣奉行入富島武裕でした。莫大な費用も苦勞の末、解決に持ち込んだようで、そのため、宗主より褒美を受けています。移転後も、新選組懸かりという役割が存在し、上原可宣がその頭取に任じられています。これらの事実も初めてわかりました。

### 三 公開講座点描

—二〇一四年度本願寺史料研究所公開講座—

以上の史料は二〇一四年度本願寺史料研究所公開講座において展示、紹介され、大喜直彦上級研究員による講演「新選組土方歳三のゆ・う・う・つ——新発見史料から——」と併せて東京・京都両会場で開催されました。

ここでは、東京会場である築地本願寺での公開講座を、準備編も含めてご紹介します。

開催日は築地本願寺の報恩講法要が厳修される十一月十一日と決めて、私たちは一日前に会場に到着し、準備に取りかかりました。しかし、親鸞聖人関東伝道八〇〇年記念として、築地本願寺では初めての講座開催であったため、準備にはずいぶん手間取りました。

舞台や講演台の設営も手慣れず、築地本願寺の職員の方々にお手伝いいただき、なんとか完成。またパソコン初心者が集まっております、プロジェクターを利用したパワーポイントのセッテ

ィングにも、かなりの時間を要しました。なにしろ初めての会場ですので、照明のスイッチやマイクの調整の場所もわからない有様でした。会場設営はほとんど手探りの状態のまま行われ、夕方遅くまでかかりながらも、とりあえず一段落しました。

今回の公開講座では発見した史料を展示したのですが、東京で展示を行うのは初めてでした。現地でレンタルした展示ケースに新選組記事が載った冊子四点を陳列し、壁には史料の写真パネル四点を設置したほか、各史料に関する解説も展示しました。

さて、当日の公開講座は、東京文化財研究所企画情報部文化形成研究室長の津田徹英氏による、第一部「親鸞聖人の行実をめぐる二、三の知見——関東伝道800年に寄せて」と、大喜上級研究員の第二部「新選組 土方歳三のゆ・う・う・つ——新発見史料から——」の二本立てで開催されました。

赤松徹真本願寺史



展示史料写真



公開講座風景

催でしたが、盛況なものとなりました。

その中には、新選組ファンの皆さんが多数来聴されていたようです。ファンの方々はツイッター、ブログ等で情報交換をし、誘い合わせて来られたグループもあったようです。

当日のアンケートによると（回収率七〇％）、一般の方のご参加が七五％で、本願寺史料研究所公開講座への参加が初めての方が九七％という結果でした。また、築地本願寺への参拝が今回初めてという方が五〇％である一方、西本願寺には参拝した

料研究所長の挨拶に引き続き、金龍静本願寺史料研究所副所長による「築地本願寺を支えた門徒たち」のミニ

講演で講座はスタート。津田先生の関東伝道八〇〇年を記念するにふさわしい、新しい知見を加えた精緻で興味深いご講義のおかげもあり、当日は参加者二〇〇人で会場は埋まり、研究所初めての京都以外での公開講座開

ことがある方が八六％でした。関東圏からの聴講がほとんどを占めるなか、京都の西本願寺へのご参拝の割合のこの高さ。おそらく新選組の屯所があったことから、西本願寺を訪れたことがある新選組ファンの方の割合が影響していることと思われる。

会場ロビーで開催された史料展示では、特に土方歳三の手紙が写し込まれた「諸日記」慶応元年六月二十五日条に多くの方が注目し、土方の手紙の内容をじっくりと見つめていました。

なかには土方の写された手紙をみて、これは「歳三さんの字ではないですね」と語っていた方もいました。写しですので、記録したのは本願寺側の書き役の文字なのですが、土方の筆跡をよく知っている方でした。やはりファンの方なのでしょう。

さらに展示の「諸事被仰出申渡留」などの冊子の厚さを見て、本願寺が留めている記録の膨大さに驚く方や、「この史料の中に、新選組や隊員に関する情報がまだまだ記されているかもしれないですね」と期待を示す方もありました。

第二部講演の反響も非常に大きく、大喜上級研究員が解説する当時の新選組の状況や土方の努力に対し、大きく頷きながら聞き入っている参加者もいらっしやいました。質問には、西本願寺は新選組が好きですか、というものがありました。新選組は西本願寺に迷惑をかけたのですから、ファンの方から出て当然の疑問でした。大喜上級研究員が「嫌いです」と即刻答えると、会場は少しざわめき、そのあと続けて大喜研究員が「でも、



ここにおられるたくさんの方々とお知り合いになることができ  
たのも、新選組のおかげですので、今は好きになりました」と  
言うと、大きな笑いが起こりました。

その後も大喜研究員のユーモアを交えての回答に、来場者の  
方々も楽しい一時を過ごすとともに、新たな新選組の側面を学  
ぶことができたようです。

## おわりに

公開講座の感想として「今後こうした発見があればぜひ公表  
してほしい」「今後も史料研究を続け、今回のような発見をし  
てほしい」といった意見が多数ありました。多くの人が  
興味を持っている新選組というテーマに加え、本願寺史料研  
究所の公開講座では初めて実物史料を展示したこともあって反  
響は大きく、アンケートでの回答だけでなく、直接要望を伝え  
て来られる参加者も多数いらっしゃいました。

講座終了後、午後からは築地本願寺の報恩講が営まれました。  
講座では法要冊子をお配りするとともに、法要への参拝を呼び  
かけたところ、故郷での報恩講参りを懐かしく思い出したとお  
話になる参加者もいらっしゃいました。

今回の新発見は、新選組の知られざる一面でした。学術的に  
も意義があることは間違いありませんが、そのみではなく、  
研究所の活動を多くの人々に理解してもらうための公開講座が

開催できたことも大変有意義なものといえます。

これからも、公開講座が普段このような研究成果に接するこ  
との少ない人々と研究所をつなぐ架け橋となることを期待した  
いと考えています。これは同時に西本願寺と特にご縁のなかっ  
た方々と、新たなご縁を結ぶことにもつながると考えます。ど  
うぞ今後も研究所の活動にご理解とご助力をお願い申しあげま  
す。

末筆となりましたが、ご来場くださった皆様、そして会場提  
供および設営サポートをしてくださった築地本願寺の職員の方  
々へお礼申しあげます。また公開講座に関する詳細な事務を  
担当して頂いた本願寺派文書担当の職員の方々へも合わせてお  
礼申しあげます。

\*なお、史料翻刻や史料の理解、西本願寺と新選組の関係につい  
ては、大喜上級研究員が作成した調査報告書を参考にしました。

### 〈参考文献〉

小川鼎三・酒井シヅ校注『松本順自伝・長与専斎自伝』平凡社、  
一九八〇年  
松浦玲『新選組』岩波新書、二〇〇三年

(本願寺史料研究所研究助手 武田美桜)